破壊神は少女のために

遠山竜児

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
破壊神は少女のために

【Ｎコード】
Ｎ３５８８Ｗ

【作者名】
遠山竜児

【あらすじ】
神が力を振るうが如く人を破壊するから、「破壊神」。一般の高校生からは畏怖を込めて、不良達からはいずれ自分が奴を倒してその地位につくという意味を込めて、倉崎はそう呼ばれていた。そんなある日、倉崎は小学生の少女にナイフを向けられる。「お前がお兄ちゃんを殺したんだ！」と。やがて彼は、この街の闇と抗争に巻き込まれてゆく…。
自分を襲う相手だけに「破壊」を与えてきた少年が、一人の少女に変えられていく、そんな物語。「俺は壊すことしかできない。だか

ら、あのガキを泣かせた野郎は……、容赦なく壊す」

倉崎の帰路

高校からの帰り道、倉崎は囲まれていた。
金髪のロン毛、茶髪のモヒカン、黒髪のオールバック…
夏服の半袖Ｙシャツをだらしなく着崩し、耳にピアスを空けている三人は、老若男女誰にとっても「不良」と認識しやすい男達だった。
短絡的で無気力で、そのくせ自己の力を誇示することには労力を惜しまない。
そんな現代不良の典型が、廃ビル付近の人通りの少ない路地で倉崎を囲んでいた。
「倉崎ぃ！　てめえ、舐めてんじゃねえぞコラ！」
左斜め後ろでポケットに両手を突っ込んでいる金髪ロン毛に恫喝される云われは、倉崎にはない。彼にしてみれば不良とは見くびるものではなく、ただただ関わり合いになりたくないものだからだ。
故に、この不良達に囲まれたときも、「家に帰るから通してくれ。話があるなら歩きながら聞いてやるから」と，いつもどおり，にあしらっていたのだが……
彼はその言動が、世間一般に言う「舐めている」行為だということに気づいていない。
「おいおいおい倉崎クンよお、この状況がどういうことか、わかってんのかアン！？」
右斜め後ろで鉄パイプを引きずってる茶髪モヒカンが言う「この状況」というものが、倉崎の認識とは大分離れているものだということはなんとなく理解できた。
だが、認識の違いを理解できたとしても、茶髪モヒカンが意味する「この状況」というものまではわからない。
倉崎にとっては、「また不良がケンカを売ってきた」程度の認識しかないのだから。

（まったく、また邪魔な奴らに道を塞がれた……）
「悪いが、さっぱりわからねえ。そこをどいてくれ」
倉崎はため息交じりにそう呟くと、三人の不良は口々に彼を罵倒した。
彼はそんな口汚い言葉にいちいち顔をしかめることはないが、この騒音はやはり不愉快だった。
彼はパーマのかかった頭を右手で掻きながら、今度は深くため息をついた。
「倉崎オイコラ、てめえ「破壊神」とか呼ばれて調子こいてんじゃねえぞ。てめえは今日ここで、俺らにみじめにボコされるんだからよお」
倉崎の正面で金属バットを肩に提げている黒髪オールバックが、両目を大きく開いて倉崎を睨みつけた。その顔には、他の二人同様に余裕溢れる笑みが浮かんでいる。この人数なら倉崎は負けるに違いないと、タカをくくっているようだ。
しかし倉崎は動じない。この状況においてポーカーフェイスでいられることは、むしろ不良達より余裕があるという証拠に他ならない。
もっとも、彼にとっては余裕どころか、目の前にある小石がほんのちょっと邪魔だから蹴り飛ばそう、くらいにしか考えていないのだが。
「ボコせるんならどうぞボコしてくれ。じゃ、俺は通るから」
彼はそう言って、目の前の黒髪オールバックを押しのけようとしたのだが……
「ザケンじゃねえぞクソが！」
黒髪オールバックが、倉崎に向け金属バットを振り下ろした。容赦なく、狙いは頭。当たれば出血は間違いない一撃が、倉崎の頭を……
襲わなかった。
倉崎が、おもいっきり振り下ろされた金属バットの中腹を、右掌（みぎてのひら）

で掴み取っていたのだから。
「なっ……」
三人組は一瞬言葉を失ったが、
「殺す！」
「クソ野郎がぁ！」
「ざけんじゃねえぞ！」
すぐに襲撃を再開した。金髪ロンゲはポケットから伸縮式警棒を取り出して殴り掛かり、茶髪モヒカンは鉄パイプで、黒髪オールバックはバットを持っていない方の手で殴り掛かった。
……まあそれも
全て無駄だったのだが。
「ったく、仕方ねえ……」
倉崎は肩にかけていた通学鞄から手を放すと、三人組の猛攻を木の葉が舞うようにヒラヒラと躱し、同時にそれぞれの顔面に拳をお見舞いしていた。
正確無比に鼻っ柱を捉え、容赦なくへし折る。拳のあまりの速さに、三人組は何が起きたかを理解するまもなく鼻血を噴出した。
倉崎は動きを止めることなく、今度は三人組の顎めがけて拳を浴びせる。顎が砕ける鈍い音とともに、三人組は残らず意識を失いその場に崩れ落ちた。
正当防衛とはいえここまで人を傷つけておきながら、彼は落ち着き払っていた。通行に邪魔だった小石を退けただけ。罪悪感も達成感も得られるはずがない。彼はアスファルトの上で脳震盪を起こし気絶している三人組には目もくれず、再び帰路につくのだった。

倉崎の帰路〔2〕

「破壊神」

彼は不良のみならず、市内の高校生の多くからそう呼ばれている。神が力を振るうが如く人を破壊するから、破壊神。

一般の高校生からは畏怖を込めて、不良達からは、いずれ自分が倉崎を倒してその地位につくという意味を込めて、そう呼ばれていた。

彼は別に、破壊神と呼ばれることに何の感慨も抱いていない。一般人からは怯えられ、不良達からは目の敵にされるのだから、このような称号など彼にとってはむしろ余計なものだった。

これがもし、破壊神の名に不良も怯えてくれるのなら、無駄にケンカをふっかけられることもなくなり多少は過ごしやすくなるのだが、彼はこの街でひとり暮らしを初めてまだ三か月しか経っていないので、破壊神の恐ろしさはそこまで伝わっていないのだ。

中学生時代のように、余りの強さ故に誰にもケンカを売られることがなくなるまでになるのは、まだまだ時間が掛かりそうだった。

不良共を蹴散らし（といっても彼には「退かした」くらいの認識しかないのだが）、廃ビル沿いの路地をしばらく歩いていると……

またもや、三人組の男達に遭遇した。

とは言っても、先ほど彼に襲い掛かった不良三人組ではない。

半袖のYシャツをいたって普通に着こなしているし髪型もいたって普通な高校生三人が、倉崎の進路を塞いでいる。

……いや、三人組ではなかった。三人に囲まれて、小柄な男子高校生が一人、今にも泣きだしそうな顔を浮かべている。その小柄さと地味さ故に、倉崎が最初彼の存在を認識できなかっただけだ。

「もう、許してください……。このお金がないと、夕飯すら作れないんです……」

「そんな固いこと言わずにさ～、貸してくれよ～」
「俺達そのお金がないと、ゲームセンターに行けなくて死んじゃうんだよ？」
「そうそう、必ず返すからさ、人助けだと思って、ね、お願い」
残り少ない蝋燭（ろうそく）の火みたいに、か細い小柄男子の声。その切実な頼みを華麗に受け流し、金を巻き上げようとする三人の男子。
彼らが金を借りても返す気がないのはわかりきっている。そのような行いをする輩は、見た目が普通でも不良であるという風に、倉崎は認識していた。
……だからといって、何か思うところが生じるわけでもないのだが。
「悪いがそこ、どいてくれねえか？」
彼らが通行の邪魔だったので、倉崎は道を通すようにお願いした。口調こそぶっきらぼうだが、いたって穏便に、なんの敵意もなく彼はお願いした。
囲んでいる側の三人は、「あっ、サーセン」といった感じですんなりと道を空けてくれた。どうやら彼らは、無駄なケンカはしない主義らしい。
倉崎は道が空いたので当然のように通ろうとしたのだが……
「は、破壊神だ！　たたた助けてください！　カツアゲされてるんです！」
小柄男子が、まるで救世主を見つけたかのように歓喜の表情を浮かべ、倉崎に助けを求めてきた。
「は、破壊神って、あの……」
「不良２０人に囲まれても全員蹴散らして無傷だったり、バイクを軽々投げつけたり、今まで折った人の骨は１００本以上、奴が通った跡は屍しか残らないっていう、あの……」
「この街最強の不良、破壊神倉崎！！」
自分が不良っていうのには同意しかねるが、２０人やらバイクやら１００本やらは本当だ。別にやりたくてやったわけじゃないのだ

が、通行の邪魔を取り除こうとした結果、そうなってしまった。
　囲んでいた三人は、破壊神の名を聞いて一気に縮み上がった。
　自分より弱いものにしか威張ってこなかった彼らは、突如現れた自分よりも遥かに強大な男にすっかり怯えている。さっきまで自分たちがカツアゲをしていた少年がその破壊神に助けを求めたのだから、尚更だろう。
「破壊神さん、お願いします！　助けてください！」
　小柄少年は倉崎登場前とは一転し、水を得た魚のように活き活きとしだした。倉崎が自分を助けてくれると信じきている目だ。
　しかし、倉崎はこの少年に見覚えがない。顔を見たことも声を聞いたこともない、完全に初対面だ。
　――だから倉崎は、素通りした。
　テクテクと気怠そうに、少年達を背に歩いていく。
　それは、彼にとっては当然の行動だった。彼は下校途中なだけであって、見ず知らずの少年から助けを求められてそれに応じる筋合いはない。
　そもそも、助けてくれとはどういうことなのか。少年をカツアゲしていた三人をぶん殴れということか？
　だとしたら、彼はその力を持っていても行使することはない。彼は、自分に敵意を向けてきた相手にしか暴力を振るわないのだ。
　それでよく破壊神の名が付いたな、と思うかもしれないが、彼は生まれつきの目つきの悪さやぶっきらぼうな物言いが災いして敵意を向けられる相手にはことには事欠かないのだ。そういった輩に暴力を振るっていくうちに、いつの間にか破壊神と呼ばれるようになってしまっただけの話だ。
「えっ！？　破壊神さん！　待ってください！　どうして、どうして助けてくれないんですか？」
　悲痛な叫び声が聞こえるが、無視した。彼を求めるその声でさえ、彼にとってはただの騒音に等しい。
（どうしてだって？　助ける理由がないからだ。それに、破壊神さ

んはないだろ破壊神さんは……）
倉崎は若干呆れ顔を浮かべ、振り返らずに歩いて行った。
とすると、水を得た魚になるのはカツアゲ三人組の方だった。彼らはあからさまにホッとした表情を浮かべ、
「夢川くーん、何調子乗ってるのかな？」
「泣きついてんじゃねえぞこのヘタレが！」
「ビビらせやがってよ！」
口々に小柄少年を罵倒し始めた。そのすぐあと、人が殴られる鈍い音とか細いうめき声が聞こえたが、倉崎の心情に変化を与えることはなかった。

倉崎の帰路〔2〕（後書き）

あいまいっ！という兄妹ラブコメを書く傍ら、新連載を開始しました。
こちらのヒロインも、自分の趣味満載なキャラにしようと思っています。

God Meets Girl.

あれから一週間後――

倉崎は再び、廃ビル沿いの路地を歩いていた。うだるような暑さから逃れるように、スタスタと自宅のアパートを目指す。

今日の学校もひたすら退屈だった。こうして下校しているほうが、風景が見れる分まだ面白い。

もっとも、いくら退屈だからといって、不良に絡まれたいとはちっとも思っていない。彼はケンカに快楽を見出す性質は持ち合わせていないのだ。

もし仮に、彼が三度の飯よりケンカが好きなバリバリの不良少年だったのなら――

今頃この街には、彼にケンカを売る不良など一人も残っていないだろう。ケンカ相手など破壊され尽くしているに決まっている。高校入学からわずか三ヶ月で、だ。それほどまでに、彼の強さは人間離れしているのだから。

そんな破壊神が歩きながら考えていることといえば――

今日の夕飯のおかずである。

一人暮らしをしている彼には食事を作ってくれる親はいないが、三食コンビニ弁当という不健全な食生活はしていない。昼食以外はすべて自炊している。

昼食も、朝早くから自分で弁当を作って学校に持っていくのが面倒くさいだけで、休みの日は基本的に自炊だ。

（エビフライは一昨日喰ったし……、今日はハンバーグにすっか。ソースはケチャップか、それともデミグラか……）

意外に子供舌な破壊神が、そんな風に思案していたところ……

「死ね！！」

――背後から、甲高い声。

その声とほぼ同時に、彼の後ろから何者かが突進してきた。

殺意のこもった怒号。口先だけでないことは明確である。が――
彼はそれを、振り向かずにかわした。
ビニール袋が風に飛ばされるように、ふわりと。
その程度の芸当は、彼にとっては無意識下のうちに行える範疇のものだった。
彼は幼い頃からケンカを売られてきたが、当然その中には「不意打ち」というものも入っている。角を曲がったら鉄パイプ、ドアを開けたら金属バットなど、何回経験したシチュエーションだかわからない。
故に彼は、ただ歩いているときでさえ無意識のうちに警戒を張り巡らし、無意識のうちに襲撃に対応するよう、無意識のうちにインプットしていたのである。
そして、無意識のうちに反撃するようにも。
――いつも通りに、目の前をうろつく蝿を叩くだけ。
それは今回も例外ではない。
突進をかわされ前につんのめった襲撃者の顔面に、容赦のない右ストレートを……
「――っ！」
すんでのところで、彼は拳を止めた。
自らの意識でか反射的にかは微妙なところだが、拳は止められた。
彼の拳からわずか3センチのところでギュッと目を閉じている襲撃者は……
どう見積もっても小学生くらいにしか見えない、小さな小さな少女だった。
年の頃は10～12才といったところか。ウェーブのかかったふわりとした栗色のロングヘアーをしている少女は、ロリータ調の服に身を包んでいて、西洋人形と見間違うような可愛いらしい外見をしている。
破壊神なら触れただけで壊れてしまいそうな、細枝のような少女の腕。その先には――

鈍色(にびいろ)の、ナイフ。
左右均整の形状で両側に刃の付いたダガーナイフが、少女の右手に握られていた。
「――刃渡り5．5センチ以上の剣は国内じゃ銃刀法違犯なんだがな。お前、何のつもりだ？」
少女が握っているナイフは、明らかに刃渡り5．5センチを超えていた。少なくとも刃渡り10センチはある。この年頃の少女が持つには、あまりにも似合わない武器だった。
もっとも、子供に似合う武器などあるのかは不明だが。
「うるさい！　私はお前を殺す！」
少女は慌てて後ろに下がり倉崎から間合いを取った。そして、ダガーナイフの先端を倉崎に向ける。そのナイフも少女の体も、哀れみを覚えるくらいにガタガタと震えていた。
「殺す？　――ったく何わけわからねえ宣言してんだよ。どんな決意だっつーの。だいたいなんで俺が殺されなきゃならねえ」
もっともな疑問だった。不良ならともかく、このような幼い少女に刃を向けられる覚えなど彼にはない。
彼の質問対し、少女は怒りで震えながら、ゆっくりと口を開いた。
「……お前が……、お前がお兄ちゃんを殺したんだ！　だから私がお前を殺す！　そう決めたの！」
（お前がお兄ちゃんを殺した？　……何を言ってるんだこのガキは）
倉崎は逡巡した。具体的な心辺りはないが、返り討ちにした不良共の中にもしかして死者がでていたのかもしれない。今まで考えたことはなかったが、それは十分有り得る話だった。
彼の拳は、棒立ちの状態からの体重を込めないパンチですら、人の骨にヒビを入れることができるほどの強度を誇るのだ。その拳はもはや、少女が握るダガーナイフ以上の凶器に等しい。そんなものをほぼ毎日人に向けていたら、死人の一人や二人でていてもおかしくはないのではないか。
（まあとりあえず……）

バチンッ！
倉崎は一瞬で間合いを詰め、目にも留まらぬ速さで少女の手首をはたいた。
はたいたといっても、彼は人差し指の第一間接付近で掠らせるくらいのことしかしていないのだが、それで充分だった。
「痛っ！！」
ガラガラと、ナイフが少女の手から離れて地面を転がる。倉崎はそれを、少女が拾えぬように左足で踏み付けた。
「ガキがこんなもの人に向けんじゃねえ。危ねえだろうが」
倉崎にとっては、素人丸出しのへっぴり腰で構えられたナイフなど少しも怖くはない。過ぎた武器は自らへ返ってくる、危ないのはむしろお前の方だ、と彼は言いたいのだ。
手をはたかれ武器を失った少女は、その場に崩れ落ちうずくまった。赤く腫れ上がった右手首を左手で押さえている。
「……ううっ、痛いよ……」
痛いで済むのなら幸運だと思うべきだろう。破壊神にナイフを向けておきながら、まだ意識を保っているのだから。
今まで破壊神を襲撃した人間は、たいてい気絶するほどの反撃を喰らっているのだし、破壊神襲撃の代償としては安価なものである。
「……ったく仕方ねえ。おい、俺が誰を殺したって？」
事と次第によっては、彼は刑務所に行くことになるのかもしれないのだから、とりあえず少女から話を聞き出そうと考えた。
少女はキリリと倉崎を見上げ、怨みのこもった目で睨み、
「お前がお兄ちゃんを殺したんだ！　お前が、お前が……、ヒ、ヒック……グスン……」
とうとう少女は泣き出した。涙がボロボロと地面に零れ、嗚咽混じりの声になる。
「お前がお兄ちゃんを……グスン……見捨て……たから……、お兄ちゃんは……ヒック」
（見捨てた？　殴り殺したとかじゃなく、見捨てただと？　それこ

そ覚えが……はっ！？）
覚えはあった。
一週間前、今彼が立っているのと同じ場所で……
彼は一人の少年を、見捨てた。
救世主を見つけたかのような顔をした、あの少年を。
悲痛な叫びを上げていた、あの少年を。
「お前が、虐められていたお兄ちゃんを見殺しにしたから……、お兄ちゃんは自殺したの！　全部……、全部お前が悪いんだ！」
（自殺……だと？）
少女の瞳に宿るのは、圧倒的な実力差を見せ付けた破壊神に対する恐怖すら超える、全てを燃やし尽くさんばかりの、黒い炎。怒りと憎悪と悲しみを掛け合わせた負の感情の塊が、メラメラと燃え上がっている。
「……もしかしてお前、一週間前ここでカツアゲされてた野郎の妹か何かか？」
「そうよ！　この……、ひ、人殺し！」
「……アイツは、自殺したのか？」
「お前が見捨てたからね！　お前が……お前のせいで……」
少女が吐き出す言葉は、倉崎を少なからず動揺させた。お前は間接的に人を殺したのだとという糾弾は、変化に乏しい彼の顔を曇らせるくらいの効果はあったようだ。
「……ちょっと待て。「見捨てたから」？　……それはどういうことだ、詳しく説明しろ」
虐めを受けていたからならわかるのだが、見捨てたから、というのは一体どういうことなのだろうか。彼はうずくまる少女に疑問を投げ掛けてみた。
「お兄ちゃんは！　……破壊神のことを、ヒーローのように思っていたんだ。なのに……お前がお兄ちゃんを見捨てたりするから……、お兄ちゃんは、唯一の希望を亡くして……」

God Meets Girl.〔2〕

市内の高校で生徒が飛び降り自殺をした、という話を一週間前から倉崎は聞いていた。テレビや新聞で、ではない。クラスメイトが会話しているのを聞いて知ったのだ。

彼はテレビも持っていなければ新聞も購読していないので、世間のニュースには疎い。

故に、彼は自殺したという少年の顔も名前も知らなかったのだが……

「おい、ヒーローってのはどういうことなんだよ。俺はそんなもんになったつもりは一度もねえんだけどな」

とは言っても、英雄視されるのはこれが初めてではない。

今まで彼が倒した不良の中には、大勢の人間から怨みを買っていたり周りに害を振り撒く極悪人もいたので、一般市民の中には彼に感謝している者も少なからずいた。

まあ、直接感謝を言ってくる人間は小数だったし、通行の邪魔を取り除いたというだけの認識しかない倉崎は、不良を倒したことを感謝されても嬉しく感じたことはなかったのだが。

「お兄ちゃんは……お前が不良絡まれている女の子を助けていたのを見て、お前に憧れていたのに……。それに、お前は不良にしか手を出さない正義の味方なんでしょ！？　なのに、何でお前はお兄ちゃんを助けてくれなかったのよ……」

（女の子を助けた？　……ああ、そんなこともあったっけな。成り行きだけどよ）

今まで倉崎が英雄視されることがあったその理由は、実はもう一つある。倉崎は、自分に攻撃してきた相手にしか暴力を振るわないからだ。

彼は、暴力を振るうことに罪悪感がない。だが、暴力に快楽を見出だす趣向も持ち合わせていない。彼はあくまで正統防衛をしてき

ただけなのだが、そのほとんどの相手が不良共だった、というだけの話なのだ。
（――ったく、どいつもこいつも何勘違いしてんだか）
「……いいか小娘。俺は、正義の味方なんかじゃねえ。通行の邪魔をしてくる小石を退けてきただけだ。てめえの兄貴とやらにヒーロー扱いされるほど立派じゃねえんだよ。
この間だってそうだ。てめえの兄貴をカツアゲしてた野郎は、別に俺に絡んできたわけじゃねえ。だから助ける義理もぶっ飛ばす理由もなかったんだよ。それくらい分かれ」
地面にへたりこんでいる少女に向けて、彼は容赦のない言葉を投げ落とした。
「なっ――何よこの嘘つき！　偽善者！」
「嘘ついた覚えもねえ。てめえらが勝手に勘違いしてただけだっつーの。だいたい俺が偽善者なら、今ここでてめえに謝ってるわ」
（――おかしい）
「だったら謝りなさいよ！　お兄ちゃんの遺骨の前まで行って、土下座して頭地面に打ち付けて謝りなさいよ！」
「ざけんなクソガキ。てめえの兄貴が勝手に勘違いして、勝手にカツアゲされて、勝手に自殺しただけじゃねえか。んな勝手な都合に無関係な俺を巻き込むんじゃねえ」
（――何でだ？）
「酷い……。お兄ちゃんを……お兄ちゃんを返せ！」
「返せも何も、奪った覚えがねえ。兄貴を虐めていた野郎共に言うんだな」
（――俺は何で、こんなにコイツに話し掛けてんだ？　俺は何で、こんなにイライラしてんだ……？）
そもそも、暴力を振るうことに罪悪感を感じることがないはずの彼が、自分を刺しにきた相手を殴り飛ばしていないことが不思議なのだ。彼は殴る寸前で拳を止めたし、ナイフを叩き落としたのだって少女の身を案じてのものだった。

通行の邪魔をするものがいれば取り除くだけ。たまたま今回は、兄貴の自殺がどうのこうのと言われたので、多少話を聞こうと思っただけなのだが……

（俺が甘いのは、相手がガキだからか？　破壊神と呼ばれてようが、所詮俺も人の子か……）

とりあえず倉崎は、そうやって自分を納得させようとしたのだが……

「お兄ちゃん……お兄ちゃん……。何で死んじゃったの……？　会いたいよ……」

少女の目から、大粒の涙。

アスファルトの上に水溜まりができてしまうんじゃないかというくらい、ボロボロと零れ落ちる。

――チクリ。

何かが、倉崎の胸に刺さった。

それは、今彼が踏み付けているナイフよりも鋭利で――

「お兄ちゃん……お兄ちゃん……」

――グサリ。

彼が今まで経験したことのないような痛みだった。

（くっだらねえ……）

彼はそれを認めなかった。

認めたくなかった。

認めたらきっと、後悔することになるだろうから。

「いつまでも泣いてんじゃねえぞ、クソガキ。こんなもんで俺を殺せると思うなよ」

彼は踏み付けていたナイフを拾い上げ――

ボキン。

刀身をへし折った。

これで会話は終わりだ、とでも言うように。

「二度と俺の前に現れるんじゃねえ。それから、人を失う痛みを知ってるなら人を殺そうとすんじゃねえ、クソガキが」

彼は二つに分断されたナイフを通学鞄に放り込み、
「次人を殺そうとしたら、容赦なく壊す」
逃げるようにその場立ち去って行くのだった。

――やはり、何かがおかしい。

God Meets Girl.〔2〕（後書き）

三人称の文体は、やっぱりまだ慣れないです……

くだらないこと

夢川翔（ゆめかわかける）、１５歳。
市内の高校に通う高校１年生。
校舎の屋上から転落して死亡、遺書等は見つかっていない。
状況からして自殺の可能性が高いが、警察は事故と事件の両面で捜査中。
――これが、倉崎がケータイのニュースサイトを通して得た情報である。
事件現場となった高校が、倉崎の自宅からさほど遠くないところにあったのは意外だった。自分の世間知らずの程度に、流石に呆れもした。
（この街の治安はどうかしてる。わざわざここで一人暮らしするんじゃなかったか……）
倉崎がパッと見てみた限りでも、この街周辺ではここ一週間でニュースに取り上げられるような事件が四つも起きていた。
連続通り魔事件、連続放火事件、引ったくり事件、そして転落死事件。
通り魔事件は、夜中人気のない道で老若男女問わず刃物で切り付けるといったやり口らしく、犯人はまだ捜査中。すでに６人が犠牲となっている。
連続放火事件は、これまた夜中に犯行が行われ、一軒家が三棟被害に遭っている。こちらも、犯人はまだ捜査中。
引ったくり事件は、夕方歩道を歩いていた四十代の主婦が、車道を走り抜けたバイクに鞄を引ったくられたという概要だった。こちらも、犯人はまだ捜査中。
そして転落死事件――
こちらはまだ、自殺と確定されたわけではない。
状況は限りなく自殺に近いが、自殺をする決定的な理由が見つか

らないからだ。
（どういうことだ？　虐めが原因じゃなかったのか？）
少年が虐めを受けていたなどということは、倉崎が読んだ記事には書いていなかった。てっきり虐めを苦に自殺したのだと考えていた彼に取っては予想外のことである。
とすると、昨日の少女が言っていた『自分が信じていた破壊神に裏切られたから』という理由が現実味を帯びてきた。
そんな馬鹿な理由は少女の勘違いに過ぎないと思いたかった彼であるが、虐めやカツアゲが直接の原因でないとすると、そう考えるのが打倒であろう。
小学生くらいの少女が、彼が原因だと言い彼をナイフで殺そうとするくらいなのだ。やはり信憑性は高いだろう。
「……だからって何だってんだ。俺には関係ねえだろ」
自分は何もしていない。
故に、何も悪くない。
彼は自分にそう言い訳をしていた。言い訳をしなければならない程には、思い悩んでいた。
「勝手に死んでった奴のことなんか知るかっつーの。あのガキもあのガキだ。逆恨みも良いところじゃねえか。
まあ、あんだけやっとけばもう襲ってこねえだろうがよ……」
そう、自分には関係のない話。
お前が原因だと突き付けられたから少し調べてみただけ。
もうこの話はおしまいだ。これ以上面倒事に巻き込まれるわけにはいかないし、関わりたくもない。
少年に罪悪感など感じていない。悪いことなどしていないのだから。
少女に怒りを抱いているわけでもない。襲撃を受けることなど慣れきっているのだから。
――忘れよう。
――何を？

助けを求めてきた少年の悲痛な叫びも、後にその少年が自殺をしたということも。
兄の敵討ちと言わんばかりに自分をナイフで刺しにきた、幼い少女のことも。
『お兄ちゃん……お兄ちゃん……。何で死んじゃったの……？　会いたいよ……』
――頬を伝って流れ落ちた、少女の涙も。
それを見たとき彼の胸に刺さった、正体不明のナイフのことも……

それはあまりにも馬鹿馬鹿しく、彼にとってはまったく意味を持たないことである。
くだらない。無意味で無価値で無味乾燥。自分には不要なことだ。
「――くっだらねえ」
気がつけば、ハァァァとわざとらしいため息をついていた。
「くっだらねえ。本当にくだらねえよ。
……で、俺は何くだらねえことしてんだ？」
彼が住んでいるアパートの近所の、廃ビル沿いの道。
学校も終わりすんなりと自宅へ帰るはずだった彼は今、家とは逆の方向へと歩いている。
彼は――
先週少年をカツアゲしていた三人組を、後ろから尾行していた。

それはあまりにも馬鹿馬鹿しく、彼にとってはまったく意味を持たないことである。
くだらない。無意味で無価値で無味乾燥。自分には不要なことだ。
――そのはずなのに。

“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”

三人組は、廃ビル沿いの通りを抜け、車が行き交う大通り沿いの歩道へと出た。横一列に並んでペチャクチャと会話しながら、歩を進めて行く。

倉崎はその数メートル後ろを、三人組に気付かれないように注意深く歩いていた。

自分が何をしたいのか、彼にはわからない。下校途中に三人組を見つけたときから、体が勝手に彼らを追うのだ。

「ほっときゃ良いのによ。あいつらも、あの馬鹿な兄妹も」

だが、自宅とは逆方向に踏み出す脚は止まらない。

まるで自らアリジゴクの巣へと向かう蟻のように、彼は自ら災厄へと脚を踏み入れて行く。

三人組は、道路沿いにあるファミレスへと入っていった。それを追うように、倉崎も店内へと入って行く。

洋風の内装をした店内を見渡すと、三人組の姿はすぐに見つかった。窓際のテーブル席に座って、メニュー表を開いている。

倉崎は真っ直ぐ、彼らの座るテーブルへと向かった。程なくして、彼らのうちの一人が倉崎に気付き、顔を青ざめた。

「は、破壊神倉崎……」

「は？　お前何言って……って！」

「なっ！？」

残りの二人も気付き、同じく顔を青ざめた。全員が倉崎の存在に気付いたときには、彼はすでに三人組が座るテーブルの目の前に立っていた。

「よお、ちょっと良いか？」

「な、ななな何の用で、しょうか？」

倉崎は努めて穏便に話し掛けたはずなのに、三人組は震えあがった。この街最強の不良と呼ばれる存在への潜在的な恐怖ももちろん

あったのだが、目つきの悪さや低くぶっきらぼうな声に加え、無意識ににじみ出ている不機嫌さに言い知れぬ圧迫感を感じてしまっているのだ。
「おいおい、ヤベーよ……」
「やっぱ、こないだのアレのことか？」
ひそひそと、倉崎に話し掛けられる原因を模索している彼らに、倉崎は無表情で用件を伝える。
「別に何もしねーから安心しろ。ちょっと聞きたいことがあるだけだ」
「は、はい！」
「ったく、そんな畏まるなよ。……端的に言う。この前お前らがカツアゲしてた野郎がいるだろ。あいつが自殺した原因は、お前らか？」
「ち、違います！　違うと……思います！」
「そ、そうだよな！？　だって……」
「俺らが夢川に絡んだのって、あれが初めてなんですから！」
「初めてだあ？」
「はいい！」
倉崎は単純に聞き返してみただけなのに、再び三人組は震え上がった。
「ほ、本当なんです！　金が欲しくて、たまたま道であった夢川に借りようと思っただけで！」
「あれ以降そーゆーことやっていないし、俺達が原因なわけないっす！」
三人組が嘘をついているようには、倉崎には思えない。完全に倉崎に怯えているうえに、三人全員で事情を説明しているからだ。もし、とっさに嘘をつこうとしたのなら、三人の息がこうまで合うはずがない。
「わかった。お前らが原因じゃねえんだな。
……じゃあ聞くけどよ、あいつが自殺した原因だか理由だか心辺

りだか、なんか知らねえか？」
倉崎の質問を受け三人組は、いかにも必死で考えていますといった表情を見せた。
「別に、虐めを受けていたって話は聞いてないし……」
「お、俺ら、夢川とはクラスも違うし今まで全然話したことなかったんですけど、あいつの家すげえ貧乏だって話を聞いたことがあるような……」
生活苦を苦に自殺。
はたしてそれは、世の高校生の自殺の理由としてはどれほどの割合を占めているのだろうか。倉崎にはわからないが、学生の自殺＝虐めが理由という先入観を持っている彼には、あまり多くはないような気がした。
「でも、俺ら実際全然わからないっす！　夢川が自殺した理由探すのが学校で流行ったんすけど、結局全然わかりませんでしたもん！」
どうやら、ニュース記事を読んだ通り、自殺の理由ははっきりとしていないらしい。
「ああそうかい。……で、お前らはその“貧乏な”夢川くんにカツアゲしていたわけだ」
彼は何の気無しに言ってみただけだった。
悪意も敵意も責める気もなく、ただなんとなく呟いただけ。しかし……
「す、すすすす、すみませんでした！」
「許してください！　ちょっと調子に乗っていただけなんです！」
「そ、そうです！　俺ら、“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”の会員費稼ぐために仕方なく……」
「ば、馬鹿お前っ！」
仲間にそう突っ込まれ、“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”の名を口にした一人は、「しまった！」といった顔をした。
「“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”だあ？」
「ひいっ！」

“狐狩猟犬(フォックスハウンド)”

倉崎はその名称を聞いたことがあった。

『倉崎てめえ、俺達“狐狩猟犬(フォックスハウンド)”ナメてっと痛い目見るぞコラ！』

この街に来てからこういった輩に喧嘩を売られたことは、一度や二度じゃない。“狐狩猟犬(フォックスハウンド)”以外の名前を名乗る連中も大勢いた。

もっとも、連中が言う「痛い目」とやらを彼が見たことはまだないのだが。

それに、彼は“狐狩猟犬(フォックスハウンド)”という名称は知っていても、それがどういうものなのかはしらない。この街に蔓延(はびこ)るただの不良グループなのだろうという予想は立てているのだが。

「す、すみませんすみません！　“狐狩猟犬(フォックスハウンド)”って言っても、俺ら入りたてで下っ端の下っ端の下っ端の、ほとんどパシリみたいなものなんです！」

「だから「狩る」のだけは勘弁してください！」

「……俺は別に、不良を「狩る」趣味なんてねえんだが……」

猟犬を名乗る輩が、倉崎に「狩られる」のを恐れているのは、なかなか滑稽だ。不良組織に入っていても所詮この三人組は小物なのだなと、彼は呆れた。

「ったく、喧嘩売りにきたわけじゃねえって言ってんだろ。

――ってか、お前らあの時、ゲーセンに行きたいから金寄越せって言ってなかったっけか？」

倉崎は、これまた、何の気無しに聞いてみただけだ。

だが、三人組に対する嫌悪感が少々混ざっていたのは否めない。その、微妙にブレンドされた嫌悪感だけで、三人組の恐怖は臨界点に達した。

「「「これで勘弁してください！」」」

三人組は一斉に立ち上がり、彼の前に財布を突き出し、深々と頭を下げた。

「金はお返しします、だから命だけは……」

「……いやだから、俺に返してどうす……」

「「「失礼しました！」」」
そう叫ぶと、三人組はドタドタと慌ただしくテーブルから走り去り、勢いよく店を飛び出した。
「……この街には馬鹿しかいねえのか？」
テーブルの上に置き去られた三袋の財布を眺めながら、割と本気で、彼はそんなことを考えてみた。

偶然の再会？

ファミレスを後にした倉崎は――
三人組が置いていった財布の処分について、悩んでいた。
交番に届けるのは面倒だし、かといってカツアゲ被害に遭っていた少年に返そうにも、少年はもう死んでいる。
ならば、少年の遺族に返す……
「アホか。そっちのほうが面倒だ」
奴の妹に会うかもしれないのだ。冗談じゃない。
二度と俺の前に現れるんじゃねえ、と言っておきながら、自分から会いに行っては本末転倒だ。
第一、自分が借りたわけじゃない金を律義に返しに行くほど彼はお人よしではない。
とすると……
「金だけ抜き取って、財布はそこら辺に捨てるか」
それが妥当な判断だろう。
彼とて裕福なわけではない。慢性的に金欠なのだ。ここはラッキーだと考え、もらっておくのが最良だろう。
彼は当然のようにその結論に達し、財布から金を取り出そうとしながら、廃ビル沿いの通りへと続く道角を右へ曲がると……
「……」
「……っつ！？」
曲がったところで、見覚えのある人物に遭遇した。
無言で棒立ちになった倉崎に対し、驚いてのけ反ったその人物は、どう見積もっても小学生くらいにしか見えない、小さな小さな少女だった。
年の頃は１０～１２才といったところか。ウェーブのかかったふわりとした栗色のロングヘアーをしている少女は、ロリータ調の服に身を包んでいて、西洋人形と見間違うような可愛いらしい外見を

……

「何してんだお前」

――その少女は、昨日倉崎を襲撃した少女と同一人物であった。

「お、お、お、お前！　な、何でこんなところに！」

驚きと怯えが混ざったような顔で、少女は後ずさりした。

その手には昨日のようなナイフなども握られていない。どうやら再び倉崎を襲撃しようとしたのではなく、偶然遭遇しただけのようだ。

「いやまあ、俺の家この近所だしよ。……ってか調度良いや。この財布なんだが……」

ダッ！

少女は踵（きびす）を返し、スカートを翻しながら、脱兎の如く駆け出した。

「おい、待てって」

だが待たない。

立ち止まったら殺される。

そんな脅迫概念に追い立てられるように、倉崎に背を向けただひたすら走り抜けた。が、

「待てって言ってんだろクソガキ」

「！？」

その声はなんと、猛ダッシュをしている少女の前方から発せられた。

慌てて急ブレーキをかける少女。

目の前には、少女の背後にいたはずの倉崎が、若干不機嫌そうな顔を浮かべて、後頭部を手で掻きながらけだるそうに突っ立っていた。

「嘘！？　え？　だって……」

少女は、倉崎がテレポートでも使ったかのように錯覚した。

だが、何のことはない。倉崎は少女の進行方向に走って回り込んだだけだ。

その速度があまりにも速かったため、何が起こったのか少女は理

解できなかったが。
破壊神と呼ばれる倉崎は、暴力だけではなく運動能力全般に優れている。人知を超えた身体能力は、実のところ喧嘩以外でも応用はきくのだ。
もっとも、喧嘩以外と言っても、学校に遅刻しそうなときに猛ダッシュをするくらいしか普段の使い道はない。
「ううっ……殺るなら一思いに殺りなさいよ！　ば、化けて出てやるんだから！」
あくまで強気に開き直った少女。だがその目元は潤んでいる。
「はあ？　なに言ってんだお前は。別に取って喰ったりしねえよ。……ほら、コレ」
倉崎は手に持っていた財布を差し出した。
「お前の兄貴をカツアゲしていた野郎のだ」
ポカンとした顔を浮かべた少女に、彼は通学鞄の中からさらに財布を二つ取り出して少女に突き付けた。
「……はあ！？　どーゆーこと！？　お金取り返してきたってわけ！？」
「まあ、そんなところだ」
三人組が勝手に財布を置いていっただけなのだが、面倒なので細かい説明は省いた。
「ほら、受け取っとけ」
しばらく迷った後、少女は倉崎の手から財布を引ったくり、
「こ、こんなんで赦してもらおうなんて甘いんだからね！　アンタのこと、絶対絶対絶対に赦さないんだから！」
倉崎をキリリとした目で睨み付けた。
もちろん、そんなものに臆するはずもない倉崎は、
「なあ、お前の兄貴の自殺の理由って、本当に俺なのか？」
いたって冷静に、もっともな疑問をぶつけてみた。すると少女は間髪入れずに、
「この腐れツリ目！」

彼を恫喝した。
「く、腐れツリ目……だと？」
ヒクヒク。
変化に乏しいはずの彼の顔が、わずかに引き攣った。
「アンタツリ目のくせに眼球が腐った魚のようなのよ！　ホント気味悪いわ！　それにこの、陰険ボサボサクルクル頭！」
「ク、クル……！？」
ワナワナと、彼は怒りで小さく震えた。
ちなみにクルクルとは、彼の髪のことを指している。この生れついての強烈なくせっ毛は、彼にとっては無視できないコンプレックスであるのだが、少女はそれに触れてしまった。
「……おいガキ。今のは聞かなかったことにしてやるから、俺の質問に答えろ」
コレは騒音コレは騒音、キレてもこっちが疲れるだけ……
なんとか堪え、一段と不機嫌になりながらも、彼は再び問い掛けた。
「お前、お兄ちゃんの言うことが信用できないってゆーの！？　やっぱり死ぬべきよ、万死に値するわ！」
「信用っていうのは相手のことをよく知っていなきゃできねえもんだ。で、俺はアイツのことをまったく知らないわけだが」
「うるさい！　とにかくお前のせいなんだから！　……だって、お兄ちゃんの遺書にそう書いてあったんだもん！」
「……ちょっと待て、お前今何て言った？」
「あっ、しまっ……」
少女はあからさまに狼狽し、慌てふためいた。
「遺書はなかったんじゃないのか？　どういうことだ」
「え、えーっと……」
少女は、何かをごまかそうとするときの癖なのだろうか、ウェーブのかかった栗色のロングヘアーの毛先を片手でクリクリといじり始めた。

謎の遺書、遺書の謎

「詳しく聞かせてもらおうか。じゃないと……」
「……じゃないと？」
「とりあえずお前をシバく」
その瞬間、少女の顔からサーっと血の気が引いていった。
「はあ！？　お前、しょしょしょ、小学生相手に何、何考えてるのよ！」
辛うじて虚勢を張ってはいるものの、少女はガタガタと震え始めた。
破壊神だということを除いても、相手は高校生の男子である。年の離れた小学生の女子では太刀打ちできるはずもない。逃げようにも、脚力が違い過ぎて難しいだろう。確実に捕まる。
「し、仕方ないわね。お前が謝ったら教えてあげても良いわよ」
だが少女には、意地があった。
頑固になるだけの、理由があった。
が、
「すまなかった」
倉崎にはなかった。
「……ええ！？」
彼は謝った。しかも、頭を下げて。
「とりあえず、お前の兄貴がカツアゲされてたときに助けなかったのは謝る。だがよ、お前の兄貴が死んだ理由はどうしても納得できねえんだ。だから、何か知ってるなら聞かせてくれねえか？」
卑怯だな、お前。
彼は心の中で、自分自身を揶揄(やゆ)した。
（すまないなんて思っちゃいねえ。けど、頭下げるだけでいいなら安上がりだ。　面倒くさいことに首突っ込んじまったが、俺みてえな暇人には調度良い娯楽になりそうだからそのまま突っ込み続けて

やるだけだ。別にこのガキの力になってやりたいわけじゃねえ）
たまたま道端に漫画雑誌が落ちてるから、とりあえずページをめくってみるか。つまらなかったらすぐに捨て置けばいい。
そのようなノリで首を突っ込んでみただけなのだと、彼は思い込んでいた。
一方少女は、鳩が豆鉄砲喰らったような顔をしていた。倉崎が頭を下げて謝るなど、彼女は微塵も想定していなかったのだから。
「お前何なのよ……。この前は、無関係な俺を巻き込むなとか言ってたくせに……」
「気が変わった。話、聞かせてくれねえか？」
「しょ、しょうがないわね……、お前みたいな極悪非道日陰男は、これで悔い改めなさい！」
悔しそうに歯ぎしりして、倉崎の目つきの悪さにも負けないくらいの眼光を放つと、少女は事の顛末（てんまつ）を語り始めた。

「――なるほど。俺のことを英雄扱いしていたお前の兄貴は、一週間前に校舎から落ちて死んだ。その次の日、お前は兄貴の友人を名乗る男から、兄貴がお前に宛てて書いたっつー「遺書」を受け取った、と」
「そうよ。この「遺書」のことは誰にも言うなって書いてあったから……」

遺書の中身はこうだった。
――学校では日常的に虐めを受け、精神的に限界の状態だったという少年は、いつか破壊神が自分を助けてくれると信じて生きてきた。
だが、自分の憧れで尊敬の対象で心の寄り所だった破壊神は、目の前でカツアゲの被害に遭っていた自分を見捨てた。
誰も自分を助けてくれない。
正義の味方にすら、自分は嫌われている。

僕なんか死ねば良い。
破壊神なんか死ねば良い。
僕は自分で死ぬから、誰か破壊神を殺してくれ。お願いだ。
そう書き連ねて、絶望した少年は自ら死を選んだ。
遺書を入れた封筒の中に、倉崎の顔写真と倉崎の住所を書いたメモと、鞘に納められたダガーナイフを入れて――

「ハァァァ」
倉崎は、かつてないほど大きなため息をついた。生じた脱力感のまま、肩を落とす。
「お前、馬鹿だろ」
「なっ！　何ですって！　このク、ククククソ野郎！」
「女がクソとかいう言葉使ってんじゃねえよ、下品だろうが。つか、お前は本当に馬鹿だな。お前を指す代名詞を「馬鹿」にしたいくらいに馬鹿だわ」
散々「馬鹿」を馬鹿にした後、彼は一呼吸置いて、
「一般論的に言えば、兄貴が自分の妹に人殺しなんかさせるわけねえだろうが」
「あっ……！」
自分が書いたテストの答案が実は解答欄が一つづつズレていた、ということに気付いたときのような顔を、少女は浮かべていた。
単純なミスほど気付きにくい。
兄が死んだことがショックで冷静でいられなかった少女は、兄の遺書の内容を鵜呑みにしてしまっていたのだ。
「で、でも、確かにお兄ちゃんの字だったもん！　ちょっと震えていたけど、絶対にお兄ちゃんが書いたやつなんだから！」
「んなこと知るか。それよりも、お前の兄貴は妹にナイフ渡して人殺しを誘導させるようなやつなのか？　遺書を兄貴本人が書いたとしても、怪しいのは遺書を渡してきた兄貴の友人とやらだろ」
「確かにそうだわ……」

「それによ、お前の兄貴が虐めを受けていたっていうのは事実なのか？　カツアゲしてた野郎は、お前の兄貴に絡んだのはあれが初めてだって言うし、奴らに聞いてもお前の兄貴が虐めを受けていたっつー話は聞いたことがないらしいし、ニュース記事だって虐めのことなんて書いてなかったぞ」
「バ、バレないように虐めていたとかじゃないの？」
「まあそうだとしても、だ。「誰か破壊神を殺してくれ」「この遺書のことは誰にも言うな」っつーのはなんか矛盾してねえか？　誰かっつーかお前に俺を殺させたいようにしか思えねえぞ、これ。とんだゲス野郎だな」
「お兄ちゃんはゲス野郎なんかじゃない！」
「なら、決まりだ」
彼は片手でボリボリと側頭部を掻き、
「兄貴の友人とやらを取っ捕まえて吐かせる、それしかねえだろ」

白馬に乗った破壊神

「協力……してくれるっていうの？」
「そう考えて良い」
しばらく互いに睨み合ったまま（といっても倉崎は少女と目を合わせていただけなのだが、傍から見ると睨んでいるようにしか見えない）、二人は沈黙した。
ジリジリと照り付ける太陽。今日も相変わらずの真夏日だ。
少女の額に、じわりと汗が滲んでゆく。倉崎も、不良共なんかよりよっぽどしつこく襲い掛かってくる夏空に眉をひそめた。
ミーンミンミンミーン……
蝉の鳴き声が鳴り響き、近くから聞こえてくるバイクのエンジン音と混ざり静寂を埋めた。
少女の汗が頬を伝い、アスファルトへと落ちる。それと同時に、少女は口を開た。
「わ、私は……」
ブォォォン！！
突如、空気を切り裂く轟音が少女の背後から鳴り響き、少女の言葉を掻き消した。
少女が驚いて振り返ると――
２０メートルほど向こうの角から出てきた大型のバイクが一台、猛スピードでこちらに向かってきた。
運転手はフルフェイスのヘルメットを被っていて顔が見えないが、がっしりとした体格から男だとわかる。肩にはなぜか女物のハンドバッグがかけられていて、遠心力で後ろへとなびいていた。
廃ビル沿いのこの路地は、車道と歩道の区別がなく狭い。当然のごとく、二人がこのまま突っ立っていたら轢かれる。
慌てて道を空けた二人の横を、廃棄ガスを撒き散らしながらバイクが駆け抜けて行った。

「待て、待てぇぇぇ！」
さらにその直後、バイクが走ってきた方向から叫び声がした。
見ると、こちらへ向かって若い女性が一人、文字通りの『必死』を体全体で体現するかのようにママチャリを漕いでいた。
ブォォォン……
バイクは倉崎が少女と再会する直前に曲がった角を曲がり、大通りへと去って行った。
「待て……っってんだろクソヤロォォォがぁぁぁ！　……『アレ』がないとアタシは……」
状況から察するに、女性は先程の男を追っていたようだ。だが相手はバイク。ママチャリで追いつけるはずもない。
女性は倉崎のすぐ近くでママチャリを停め、追うのを諦めがっくりと肩を落とした。しかし、何かに気付いたのか直ぐさま顔を上げると、
「そうだ！　警察警察……って、ケータイがない！？　バッグの中じゃん！　あああもう、アタシのバカバカバカ！　何でポケットに入れないのかな！？」
すぐに落胆し、ゴシゴシと頭を掻きむしった。
（なんだぁ、この馬鹿みたいな金髪は……）
キーキーと金切り声をあげているこの女性は、顔こそ日本人だが、見事なロング金髪に見事な巨乳、スリムかつダイナマイトな体型の、日本人離れなプロポーションをしていた。
街を歩けばモデルのスカウトなどいくらやってくるのかわからない。事実、自身が身に付けているブランド物のTシャツやブランド物のジーンズの魅力を完璧に引き出していた。
彼女とすれ違った男なら10人中9人は確実に振り向くだろう。残りの一人はよそ見をしていて彼女に気付いていないやつだ。それほどまでに完璧な美人なのだが――
「死ね死ね死ねぇ！　脳髄ぶちまけて死ねぇぇぇ！」
残念なことに、その顔は憤怒と後悔でヒステリックに歪んでいた。

金髪の女性はママチャリを降りると、胸部の二つの塊をゆっさゆっさと揺らしながら悔しそうに地団駄を踏み始めた。顔の血管は浮き出て、目は血走っている。もう色々と台なしである。
「ああもう、よりによって『アレ』が入っているときに……ってああ！　破壊神じゃん破壊神！　やば、超ラッキー！」
女性はいつかの少年のように、倉崎の存在を視認するやいなや水を得た魚のように生き生きとしだした。
「ちょっとちょっと、さっきのバイク野郎追っかけてアタシのバッグ取り返してよ！　引ったくりなの引ったくりぃ！　ああもう、ム・カ・つ・くぅぅぅ！」
「……誰だお前？」
彼はこの女性に見覚えがなかった。
このような目立つ外見の女性と関わったならば、他人にあまり関心のない彼でさえさすがに覚えているだろうが、記憶の片隅をつついてみてもこの女性に関するメモリーは何一つ出てこない。
「細かい話は後！　とにかくアイツを追って！」
「だが断る」
「ほら自転車貸すから、頑張って！」
倉崎の拒絶を華麗にスルーして、彼女は自分が漕いでいたママチャリを押し付けた。
「……おい女、俺は断るって言ったんだが……」
「追い掛けなさいよ！」
そう怒鳴ったのは、先程まで倉崎と対峙していた少女だった。倉崎の顔を真っすぐ見つめ、強い口調で命令してくる。
「はあ？　何でお前が……」
「いいから！　とっとと追い掛けなさいって言ってるのよウスノロ！　お前日本語わからないの？」
「そうよそうよ！　良いこと言うじゃないのキミ！　ほらほら、早くして、ね、お願いっ！」
女性は顔の前で両手をバシッと合わせ、ギュッと目をつむった。

「いや、追い掛けろと言われてもな……」
（コレでかよおい）
押し付けられたのは、白銀に煌めく二輪の自転車。高級品なのだろうか、洗練されたボディをしている。
だがママチャリだ。
ギアが１０段階もついていて、マックスギアでおもいっきり漕げばかなりのスピードが出るだろう。そのスピードで漕いでもビクともしなそうな、威風堂々とした体躯をしている。
だがママチャリだ。
猛スピードで走り去って行ったバイクを追うなど、常識的に考えて不可能である。
「追い掛けなさい、さもないとアンタにこれ以上何も教えてあげないわよ」
（……ったく、どいつもこいつも……。何で俺がそんなことしなきゃならねえ）
倉崎は、自分が面倒だと思ったことには関わらない。それが自分に危害を加えたり自分の利益になるようなことなら別だが、見ず知らずの他人のわけのわからない頼みに応える理由はない。
少女に関わろうと思ったのも、単なる暇潰し代わりだったはずだ。今すぐ別の暇潰しを探しに行ったって構わないのに。
「キリキリ動きなさいよ昼行灯（ひるあんどん）！」
何で少女がそこまで必死になるのだろう。倉崎にはわからない。この金髪と知り合いなのだろうか、だから助けてやりたいのだろうか、それとも……
「……ったく、仕方ねえ」
彼はママチャリに跨がると、ゆっくりとペダルを漕ぎ始めた。
ふとももの筋肉が躍動し、ママチャリに息吹（いぶき）を注ぎ込む。
彼は一気にギアを１０まで上げると、バイクが走り去った方向へ、先程のバイクを上回るスピードで駆け抜けて行った。
その瞬間、辺りに気流が生まれ、少女のスカートを押し上げピン

ク色の下着を露出させた。
だが少女は、それに気付く余裕もないほど、破壊神の姿に目を奪われていた。
破壊神は、常識すらも見事に壊してみせたのだ。

※番外編：オルレアンの乙女　（前書き）

作者が連載中の、『破壊神は少女のために』の設定と世界観を踏襲し、同じく作者が連載中の『あいまいっ！』の作風で書いた、ラブコメディ小説です。

舞台は、倉崎が住んでいる街の隣町です。“狐狩猟犬（フォックス・ハウンド）”などの設定も登場します。

肩の力を抜いて、一晩で一気に書き上げました。同じく肩の力を抜いて楽しんでいただけたら幸いです。

※番外編：オルレアンの乙女

俺――

津田風音（つだかざね）は、白銀のロングヘアーとスレンダーな体型が自慢の女子高生だ。

ただし、普通の女子高生ではない。

市内最大級の不良グループ、“悪髏零闇（オルレアン）”の創設者でありボスなのだから。

幾多もの不良を蹴散らしてきた、不良の中の不良。最強の女。平成のジャンヌ・ダルク。それが俺だ。

「また紅い特攻服なんか着て……。おい風音、今日も喧嘩してきたのか？」

俺が家に入って靴を脱ぐなり、リビングのドアを開けて話し掛けてきたこの優男は――

俺の兄貴、津田裕（つだゆたか）だ。

高校時代は陸上部に所属していたらしく、実は筋肉質な体格なのだが、服を着てるとまったくわからない。妹の俺でも勝てそうだ。というか勝てる。

なぜなら俺は、最強だから。

タイマンなら誰にも負けねえ。

この自信は過剰なんかじゃない。今までの戦績という裏付けがある。男だろうが女だろうが、武器を持っていようがいまいが、全て蹴散らしてきたのだから。

「うるっせえんだよコノヤロォ！　関係ねえだろうが！　俺がどこで何しようか勝手だろ！」

俺は脱いだばかりの靴を兄貴に投げ付けた。兄貴はモロに顔面に喰らい、盛大にずっこける。避けろよなこれくらい……

「風音、関係ないなんて言うなよ……。俺はお前が心配なんだ」

兄貴は靴を投げ付けられたことを怒りもせず、なよなよとした言

葉をかけてきた。
「黙ってろコノヤロォ！　どうせ心配っつっても、世間体が心配なんだろ！　そりゃそうだよな、妹がこんなヤンキーだなんてご近所様には肩身が狭いよな！」
「それは違う……。俺は、純粋に風音が心配なだけなんだ」
兄貴はゆっくりと腰を上げ、
「喧嘩なんて、するもんじゃない。お前が怪我したらどうするんだ」
俺のメンチにも怯まず、俺の目を真っすぐと見つめてきた。
「……は、はあ！？　バ、バッカじゃねえのテメエは！　何寝ぼけたこと……」
「俺は真面目だ」
……それが嘘じゃないってことぐらい、偏差値３２の俺でもわかる。いつになく、兄貴は真剣な眼差しをしていた。
「俺はお前が大事なんだ。大切な妹に、人を傷付けるのも傷付けられるのもしてほしくない。わかるだろそれぐらい……」
「何一つわかんねえよ！」
俺は一段と声を荒げ、ドカドカと廊下を踏み鳴らして２階へと続く階段に向かった。
「俺はお前のことなんてなんとも思ってねえんだよ！　二度と話し掛けてくんじゃねえぞコノヤロォ！」
そう吐き捨て、俺は階段を一段一段踏み潰していくように登って行った。

自分の部屋に入るなり、俺は机の引き出しを開けて、男物のＴシャツを取り出した。そしてそのまま、ベッドへと……
「兄貴……だーい好き！」
兄貴のＴシャツをギュッと胸に抱きしめ、豪快にダイブした。
「やばいやばいやばい、俺の兄貴ちょーカッコイイ～！　マジ惚れるぅぅぅ！」

ついさっき、兄貴に散々酷い言葉を浴びせていた俺は、本当は――
兄貴のことが、大大大大大好きなんだよ！

「兄貴兄貴兄貴ぃ……ああもう！　どうして兄貴は兄貴なんだよコノヤロォ！　兄貴が兄貴じゃなかったら力ずくでモノにしてやるのによ！　エヘヘへ……」

私は兄貴のTシャツを顔に押し当て、兄貴の匂いをおもいっきり吸い込んだ。

　昨日兄貴が一日中着ていたTシャツには、兄貴の良い匂いがタップリと染み込んでいる。禁断の香りが、俺の鼻腔を甘ったるくくすぐった。　体の芯から熱くなってくる。

「兄貴だーい好き……。それにあのセリフ……。兄貴ったら俺のこと、大事とか大切とか……ってキャー！　うーれーしーいぞコノヤロォ！」

　――兄貴愛してる兄貴……

　親が死ぬ前から、俺の面倒を一生懸命見てきてくれた兄貴……

　俺が５人もの男に闇討ちを受けたとき、たまたま通りかかったのを幸いと捨て身で俺を庇ってくれた兄貴……

　次の日病院のベッドで寝る羽目になったにもかかわらず、自分の体よりも俺のことを心配して病院を抜け出してきてくれた兄貴……

　この感情（恋心）はいつからだろう。
思い出せない。が、とにかく、俺は昔っから兄貴のことが大好きだった。

　兄貴の前じゃ、素直になれない。心にもないことをいつも言ってしまう。そして後で後悔する。

　こうして独りでいるときにしか、俺は本当の気持ちを吐き出せな

い。独白独唱、誰ともなしに呟くだけ……
「兄貴……もう止まらないよぉ……」
俺の頭ん中が、兄貴で満たされてゆく。もう限界だ。
俺は本能のままに、自分の胸と股の間に手を伸ばし、自らの体を慰め始めた。
「アンッ！　兄貴、兄貴ぃ……そんなところ触らないでぇ……アンッ！　き、気持ちいいよぉ……」
もちろん、オカズは兄貴以外に考えられない。

次の日――
「オイコラ津田！　てめえ、女の分際でチョーシこいてんじゃねえぞコラ！」
時刻は午前０時、場所は市内の河川敷のデカイ橋の下。
俺らが住んでいる黒割市に隣接する狐原市の不良グループ、“狐狩猟犬”の一部隊と、俺達“悪髏零闇”の特攻部隊が対峙していた。
先程俺を怒鳴り付けてきた敵の頭は、後ろに１０人ほどの仲間を従えている。皆一様に目が血走っていて、殺る気満々といった感じだ。
対する俺も、後ろに仲間を１０人ほど（男７人に女３人）従えている。
“悪髏零闇”と“狐狩猟犬”の戦時協定として、戦いを仕掛けるときは事前通告の部隊戦とし、一つの戦いで動員できる人数は部隊の頭一人と部下１０人までと決めているのだ。
お互いとてつもなくデカい組織であるため、総力戦など行ってしまえばあっという間にサツが来て中止になってしまう。まどろっこしくてチマチマしているが、こうするしかないのだ。
「うるっせえぞ柏木！　んでテメエみてえな三下がノコノコ出てきてんだコノヤロォ！」
俺も負けじと、敵の頭を怒鳴り付ける。気合いで負けたら終いだ、

女だからこそ絶対にナメられちゃいけねえ。
「黙れ！　テメエなんかこの柏木サマ一人で十分なんだよ！　１０分で十分に終わらせてやるぜ！」
シーーーン……。
柏木の寒いギャグに、敵も味方も静まり返った。
――ここはどこだ？　夏だってのに氷点下じゃねえか。テメエのくだらねえギャグを温暖化防止に利用しやがれ。
「くっ……、この……
オメエら！　殺るぞオラァ！」
オ、オウ！　と慌てて声を張り上げる、柏木の部下たち。
オメエら、こんなやつの下につかなきゃいけないなんて不幸だよな……
一方の俺の部下たちも、「上等じゃねえか！」「殺れるモンなら殺ってみやがれ！」と口々に怒号を放ち、臨戦態勢を整える。
まさに一触即発。
猛獣共が血で血を洗う、猟奇な大サーカスの幕開けが近づく。
そして俺は、紅い特攻服の腕を捲くりあげ、
「ミンチにしてやるぜコノヤロォ！」
舞台の幕を開けた。
――さあ、戦争の始まりだ。
テメエらの命、ねこそぎ刈り取ってやるぜ！

とその時――――

「風音！」
河川敷の土手の上から、俺の名を叫ぶ金切り声がした。見ると――
「あ、兄貴！」
俺の兄貴が、息も絶え絶えといった顔で膝に手をつき、俺を食い入るように見つめていた。

「な、何しに来たんだコノヤロォ！　とっとと帰りやがれ！」
――なんで、なんで兄貴が……？
こんな喧嘩してる姿、ホントは兄貴に見られたくないのに……
謎の男の登場に、敵も味方もキョトンとしてしまっている。出鼻をくじかれた、気勢を削がれた感が戦場に漂う。
「俺一人じゃ帰らない。……風音、一緒に帰ろう。もうこんなことは終わりにして」
――アレ、姐さんのお兄さんじゃねえか？
――ホントだ！　暗くてよく見えなかったけど、たしかにそうだ！
――でも、なんでわざわざこんな所に……？
――決まってんだろ！　姐さんが心配で加勢しに来たんだよ！
――さっすが、姐さんの兄君っす！　気質（かたぎ）なのに男気あるぅっす！
俺の仲間たちが口々にひそひそ話を始めた。アイツらには昔、俺の兄貴には死んでも手を出さないようにさりげなく言って置いてあるから、間違っても兄貴に手を出すことはないだろう。全部隊のメンバーに兄貴の顔写真をメールで送ってあるから、大丈夫なはずだ。
一方、“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”の連中はと言うと……
「オイコラてめえ！　いきなり出てきて何チョーシこいたこと言ってんだオラァ！」
「俺達は今、このメス豚とお楽しみ中なんだよ！」
「殺されてえのかクソ野郎が！」
口々に兄貴を罵倒し始めた。
「テメエら、何俺の兄貴に汚い言葉吐きかけてんだコノヤロォ！
兄貴をバカにすんじゃねえ！　ミンチにすんぞ！」
――とは、心の中で思っていても口には出せない。やっぱり、兄貴の前じゃ素直になれないんだ。
兄貴は“悪髏零闇（オルレアン）”も“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”も眼中にないようで、俺だけを見つめながら、土手を駆け降りてきた。そして、一歩一歩、俺が立っている場所へ近づいてくる。
「風音……昨日も言ったろ。お前は俺にとって、この世に二つとな

い大切な存在なんだ」
――た、大切な存在！？　またそんなこと言って……
一歩一歩。
間合いと一緒に、心の距離も縮めようとする兄貴。
「う、うるせえよ……コノヤロォ……」
――今が真夜中で、そのうえ月も星も出ていなくて助かった――
こんな顔、兄貴にも敵にも仲間にも見られたくねえからよ。こんな――
嬉しそうにほほ笑む、“悪髏零闇（オルレアン）”のリーダーの真っ赤な顔なんて。
「風音……」
とうとう、兄貴は俺の目の前まで来た。相変わらず、俺の目を真っすぐ見つめてくる。俺は堪らず、斜め下に顔を逸らした。
すると兄貴は、俺の頬に手を添え、俺の顔を自分のほうに向かせると……
「お前は、俺のこと嫌いか？」
ニッコリと、慈愛に満ちた優しげな笑みを浮かべた。
「う、う、う、う、うるせえぞ、コノ、コノヤ……きら、きらいなわけなんてな……きにしもあらずもあらずがなでこれはその……」
――なにテンパってんだ俺は！
今こそ、素直になるチャンスだろうが！
伝えるんだ、俺の本当の気持ちを……
恋愛感情は伝えなくてもいい。ただ、「兄貴のことは嫌いなんかじゃない、本当は大好きで、いつも感謝しているんだ……」と、そう伝えたいんだ。
たったこれだけのことが、今までずっと言えなかった。
けど今、俺は素直になれている。兄貴の前で、自然と、喜びの笑みを浮かべられている。今しかない、今しかないんだ……
俺の本当の気持ちを……
「き、嫌いなんかじゃない。俺は、本当は兄貴のこと……」

「イチャついてんじゃねえぞクソアマがァァァ！」
柏木（KY）がダッシュで向かってきて、俺の言葉を掻き消した。
柏木（ブサイク）は己の顔面の非芸術性と女性経験の乏しさを呪うかのように、私がこの世で1番美しいものと考える兄貴の顔面目を、拳（汚物）で汚そうとしてきた。
驚いて目を見開いた兄貴。体がすくんでいる。
――マズイ、このままじゃ兄貴が……
気付いたときには、体が勝手に動いていた。
「俺の大切なモンに手ェ出すんじゃねえ！！」
ゴバッ！
渾身の右ストレートが、柏木（クズ）の鼻っ柱を捕らえ、数メートル向こうへと吹っ飛ばした。
「邪魔すんじゃねえぞコノヤロォがァァァ！！　こちとらおとりこみ中だ、後にしやがれ！！」
「柏木サン！」
「このアマ！」
「ぶち殺してやる！」
今度は、柏木（死体）の部下共が一斉に襲い掛かってきた。
「姐さんと兄上の邪魔すんじゃねえ！」
「腐った犬っころ共がぁ！」
「姐さんとお兄様を護れぇぇぇ！」
俺の大切な仲間たちが、“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”から俺達兄妹を護るために飛び出し、次々に連中と衝突し始めた。
「姐さん、兄君、雑魚は俺らに任せて、後はごゆっくりどうぞっす！」
“悪髏零闇（オルレアン）”随一の戦闘力を誇る和馬（かずま）が、俺と兄貴に向けてウィンクを決めると、手をブンブン降りながら駆けていった。そして間もなく、敵を2、3人一瞬で蹴散らし雄叫びを揚げた。
兄貴はそんな和馬を見て、
「不良の友達なんて早々に縁を切って欲しかったんだけど……良い

仲間を持ったんだな、風音」
「兄貴……」
――やばい、どんどん顔が熱くなってくる。
おい柏木(瞬間停却機)、なんかくだらねえこと言って俺の顔面冷やしてくれよ……
「……なあ風音、あのさ……」
――何だ？
さっきまでクールだったのに、突然頬を赤らめモジモジしだして……
「さっきの言葉、本気にしていいんだな」
「さっきの？　……ってあああ！？」
――そ、そういえば俺、柏木(ゲス)を粛正したとき……
『俺の大切なモンに手ェ出すんじゃねえ！！』
こ、こんな恥ずかしいセリフを！！！！！！！
「え、えと、あれはその場の勢いというか、テンションに身を任せた結果の事故というか、なんというか……」
――これじゃダメだ。
せっかく、無意識とはいえ、本当の気持ちを叫んだんだ。
ごまかしちゃダメだ。
なかったことにしてはいけない。
勇気出せよ俺……
お前、“悪髏零闇(オルレアン)”のリーダーなんだろ！
平成のジャンヌ・ダルクなんだろ、コノヤロォがァァァ！
「本気にして、いい……ほ、本気にしやがれコノヤロォ！　俺は、本当は兄貴のこと大大大大大好きなんだからな！」
言った。
ついに言えた。
ずっと言いたかったこと、今まで言えなかった本当の気持ちを……
「お、俺も……だ。昔から言ってるが改めて言わせてくれ。しつこいかもしれないけど……俺も、お前のこと大好きだ」

兄貴は俺と同じく顔を真っ赤にして、はにかんだ笑顔を浮かべると……

ナデナデ。

俺の頭を、優しく、寝かし付けるように、撫でてきてくれた。

ボンッ！

元々真っ赤だった俺の頭が、ますます真っ赤になってしまったのがわかる。

兄貴、そいつは破壊力抜群だぜコノヤロォ……

本当は、素直になれてる今でも、こんな照れてる顔見られるのは恥ずかしいんだけどよ……

「兄貴、……ありがとな」

ニコッ。

兄貴と同じように、俺もはにかんで見せた。

「兄貴、兄貴がそんなに俺のこと大事に思ってくれてるならよ、俺……足洗うわ。気質（かたぎ）に戻って、もう少し真面目に人生考える。けどよ……」

俺は一呼吸だけ置いて、続けた。

「俺は、“悪髏零闇（オルレアン）”の仲間も、黒割（くろわれ）の街も護らなくちゃいけねえ。隣街の狐原（きつねはら）は今、巨大な不良勢力が乱立していて、いつ黒割の街をめちゃくちゃにするかわからねえ状況なんだ。最近は『破壊神』とか呼ばれてる化け物みてえな不良も入って来たらしいし、いつ戦火がこっちへ飛んでくるかわからねえ。

“悪髏零闇（オルレアン）”は最初はただのどうしようもないゴロツキの集まりだったけどよ、今は一般人には手を出さずにこの街を護るためだけに活動してるんだ。だからさ、もうしばらくは……」

この続きを言うのが怖くて、俺は目を伏せた。

俺には護らなくちゃならねえもんがある。けど、兄貴を落胆させるのが怖い。俺は……

――その時、俺は気付いた。

さっきまでの汚らしい怒号や人を殴打する鈍い音などの喧騒が止

み……

河川敷が、真夜中相当の静かさを取り戻しているということを。

「姐さん、もう、大丈夫っす」

後ろを振り返ると、和馬が親指を立てたグッジョブのサインを送っていた。見ると、辺りに立っているのは全員“悪髏零闇（オルレアン）”のメンバーだけで、“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”の連中は全員仲良く地面に伸びていた。

「この街のことも“悪髏零闇（オルレアン）”のことも、俺らに任せてください！」

「俺らもう、姐さんに護られてばかりの弱い奴らじゃありませんから！」

「一般人に迷惑かけない、敵とはいえ必要以上に痛め付けない、絶対に黒割を守り抜く。姐さんが作ったこの3箇条、自分は墓に入っても忘れません！」

口々に頼もしいことを言いやがる、俺の仲間たち……

「お、オメエら……コ、コノヤロ……」

――や、やべえ。涙声になってきちまったぞコノヤロォ。

リーダー泣かせるとか、不良失格だコノヤロォ……

「姐さん。もう、いいんっすよ」

和馬は今まで見せたことのないような穏やかな顔を浮かべると……

「もう、普通の女の子に戻っていいんっすよ」

その言葉が鍵となり、俺の記憶の扉が開いてゆく――

今から6年前――

父さんと母さんは、共に県会議員だった。

県の方針――　狐原市の再開発に反対の立場をとっていた二人は、狐原の自称改革組織、“改革の狐（リフォーム・フォックス）”に敵意を持たれていた。

かつての狐原市は、これといった観光地もこれといった商業施設も、これといった大企業の支店もない、寂れた街だった。

とくに少子化と都市部への人口流出は顕著で、かつては8万人いたという学生は10年間でその30パーセント以下にまで減ってしまった。

このままではマズイ。対応策を模索していた狐原市は、救世主になりえる存在を見つける。
それが、日本最大、世界でも5本の指に入るほどの大財閥、磯菱（いそびし）グループだった。奴らが、狐原の再開発に全面的に協力すると申し出てきたのだ。
しかし、狐原市が磯菱グループに支配され、磯菱グループが全ての権力を握る『王国』になることを危惧した俺の両親は、徹底して反対の立場をとった。
――それが、俺達兄妹が幼くして二人暮しになってしまう原因だったんだ……

自称街を護るための改革組織、実態はただ暴れたいだけのイカれた不良集団“改革の狐（リフォーム・フォックス）”に、両親は殺された。警察はなぜか事故扱いにしやがって、結局犯人は裁かれなかった。
――なんで、父さんと母さんは殺されなきゃならなかったの……？
なんで、殺した犯人はのうのうと暮らしているの……？
だったら、私が……
その日から、俺は一人称を変え、話す言葉も心の中の言葉も全て男口調に変えた。紙を銀色に染め、耳にピアスを空けたりもした。
そして、年上のワルそうな奴らを唆し、“改革の狐（リフォーム・フォックス）”をぶっ潰すだけが目的のイカれた不良グループ、“悪髏零闇（オルレアン）”を結成したのだ。

普通の女の子でいることを捨てた。
それが、１１歳の夏だった。

それから3年後――
狐原は見事に再生を遂げた。両親の危惧通りに『磯菱の王国』になってしまったものの、街には商業施設が立ち並び、企業の誘致や教育施設の充実にも成功した。人口はどんどんと回復していき、あ

と数百人でかつての人口に戻る、というところまできた。
だが、治安はさらに悪くなっっていった。
それが何故なのかは、未だにわからない。磯菱の奴らが非合法な商売をしやすいように警察関係に手を回しているせいだ、という噂が流れたが、真相は闇の中だ。
“改革の狐（リフォーム・フォックス）”は改革という仕事を終えたにもかかわらず、街を護る活動と称した暴力行為を行い、意味もなく周囲の市や黒割の住人たちを襲った。
さらには“改革の狐（リフォーム・フォックス）”だけではなく様々な不良組織が狐原と黒割、その周辺の市に乱立し、群雄割拠の戦国時代となっていった。
そして今度は……
俺と兄貴が、“改革の狐（リフォーム・フォックス）”の餌食となった。
まだ小娘だった俺に、高校生の男5人で闇討ち。徹底的にボコされることを覚悟した俺を――
たまたま通り掛かった兄貴が助けた。
俺の代わりに、兄貴が病院送りになってしまった。
――その日、俺は決心した。
“改革の狐（リフォーム・フォックス）”をぶっ潰す？　そんなくだらねえ目的じゃねえ……
黒割と兄貴を護るために、俺は“悪髏零闇（オルレアン）”を導くんだ……

神のお告げを聞いた気がした。
それが、14歳の夏だった。

そして今――

「姐さんがずっと無理してきたの、俺達は知ってるっすよ」
「おい、和馬コノヤロォ……何言って……」
「姐さんがコンビニに置いてあった少女漫画を物欲しそうに見てた

のを、自分は知ってます！」
「大石！　テメエ、どうしてそれを！」
「男物の服を好んできているようで、実際はカワイイ服を着てみたいって思ってることも、知ってます！」
「美好（みよし）！　テメエまで！」
「姐さんが本当に護りたかったのは、この街と俺達と、何よりお兄さんなんだなーってことを、アタシだけじゃなくみーんな知ってまーす！」
「リー子！　な、何言い出しやがるんだコノヤロォ！」
「風音……」
――今度は兄貴かよ！
兄貴は再び俺の頬に手を添え、自分の顔へと振り向かせた。
俺の視界が、兄貴だけで埋まってゆく。その力強くも美しい瞳に吸い込まれてしまいそうだ。
「お前が本当は誰よりも優しいやつだってことは、俺が1番よく知ってる……。だから今度は俺に、お前をめいいっぱい優しく護らせてくれ」
「……あ、兄貴ぃ……」
うるうると、俺の目に涙が浮かんだ。
泣いてはいけないなどと、もう思えなかった。
普通の女の子である自分は、棄てたはずだった。その反動で、兄貴に恋をしたのかもしれない。
ずっと無理してきた。
そのことに今さら気付かされた。
喧嘩慣れしていくうちに男よりも強くなっていったため、自分が生きる場所は戦場なのだと思い込んできた。
けれど、違ったんだ。
私一は、普通の女の子として生きて……
「俺達は、磯菱グループが狐原の治安の悪化に関わっていると睨んでいる」

私の頬から手を離すと、突然真剣な面持ちになった兄貴。
「俺……たち？」
何のことだか全くわからず、私は聞き返した。
「俺と大学の友人達だ。狐原市にキャンパスがあるからな、狐原の住人とその周辺の住人数人で、狐原の治安悪化の真相を究明するグループを作ったんだ」
「い、いつの間にそんなの……」
「構想は以前からあったけど、今日の夜結成したばかりだ」
兄貴はそう言ってはにかむと、
「風音には、そのメンバーになって欲しい」
黒割を護るための、新たな道を提示した。
「普通の女の子として生きて、幸せな人生を送って欲しい。けれど、風音の中に『この街を護りたい』という強い意志が見えた。だから、喧嘩とは別の方法で、黒割と狐原を護っていかないか？」
「兄貴……」
「もちろん、お前に危険は及ばせない。お前は俺が護る」
ボンッ！
本日二度目の顔面沸騰。
兄貴の最っ高にクールなセリフに、心臓（ハート）どころか全身を撃ち抜かれた。
「う、うん……。私、頑張る……」
熱を出した病人みたいに朦朧としながら、私は何度も頷いた。
それを見るやいなや、仲間達の歓声がドワッと耳に飛び込んできた。パチパチといった拍手や、ヒューヒューといった口笛の音も聞こえてくる。
「和馬、“悪髏零闇（オルレアン）”のリーダーは、お前に任せた。しっかりやれよな！」
これが、“悪髏零闇（オルレアン）”のリーダーとしての私の、最後の命令だった。
「ハ、ハイっす！　……よっしゃあ！　頑張るっすよぉぉぉ！

！」
　みんなが一斉に、笑みを浮かべながら和馬へ抱き着いていく。予想通り、この人選に誰一人として文句を言う奴はいなかった。
「兄貴、」
「なんだい、風音？」
「今まで、冷たくしててごめんね」
「なんだ、そんなことか……。そういう部分も含めて、俺はお前が好きなんだよ」
　ナデナデくしゃくしゃ。
　今度はさっきよりも少しだけ力強く、私の頭を撫でてきた。
　――もう、心地良さ過ぎて死んじゃいそう……
　兄貴のナデナデにうっとりとし、トリップ状態になっていった。けれど……
「やべえ！　ポリ公だ！　ポリがきやがった！」
　仲間の誰かが叫んだ。慌てて土手の上に目をやると、パトカーらしき車両が2台停まっている上に、警官らしき人物が土手を駆け降りてこようとしていた。
「おいオメエら！　ずらがるぞ！　モタモタすんじゃねえ！」
　最終的には、これが“悪髏零闇（オルレアン）”のメンバーに出した最後の命令になってしまった。俺ら全員、猛ダッシュで河川敷を駆け抜ける。
「やっぱ、警察呼んだのはまずかったかな……」
　兄貴が苦笑いをした。
「……はあ！？　兄貴が呼んだの！？」
「いやさ、狐原でグループの結団式やった帰りに、そこで伸びてる不良連中が「津田の野郎ぶっ殺す」って言ってるのを聞いたから、風音のことかと思い心配で後をつけたんだよ。そしたら大人数で喧嘩が始まりそうだったからさ、つい……」
「コ、コノヤロォォォ！」
　その後俺達兄妹は顔を見合わせ、豪快に笑い出しながら深夜の河川敷を駆けてゆくのだった。

光りの道筋が見えた。その先には、黒割の平和になった街と、笑顔でじゃれあう“悪髏零闇（オルレアン）”のメンバーと、仲良く手を繋ぐ、私と兄貴の姿が――

兄貴とは、恋人になれるのかわからない。けど、今のままでも十分幸せだ。

これが、１７歳の夏だった。

※番外編：オルレアンの乙女　（後書き）

津田裕の名前の由来は、Ｊａｎｎｅ　Ｄａ　Ａｒｃというバンドのギタリストの名前です。ちなみに、バンドのＪａｎｎｅ　Ｄａ　Ａｒｃの名前の由来は、百年戦争の英雄のジャンヌ・ダルクではなく、漫画のキャラクターから取ったそうです。

“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”などの組織や数々の設定は、『破壊神は少女のために』で出てきます。

兄妹ラブコメの作風は、『あいまいっ！』を書くような感じで書いています。よろしかったらそちらも読んでみてください。

最後に…

『オルレアンの乙女』を読んでいただき、本当にありがとうございました！

鮫島事件

「ふう……、上手くいったみたいだな」

金髪のグラマラスな女性からハンドバッグを引ったくることに成功した鮫島（さめじま）は、バイクのスピードを緩めながら安堵した。

――1年前の春、大学に通うためこの街――　狐原市に引っ越して来た鮫島は、引越しからわずか2日で“白虎連隊（びゃっこれんたい）”と名乗る5人の不良にカツアゲされそうになった。

高校時代は野球部に所属していた鮫島は、別段喧嘩が苦手であったり気が弱かったりするわけではないのだが、さすがに不良5人をまともに相手にできるはずもなく、おとなしく財布を差し出してこの場をしのぐしかないと諦めた。

しかしそこに、今度は“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”の一員と名乗る一人の男が、鮫島を助けにきたのだ。

男は一瞬で“白虎連隊”の5人を蹴散らすと、鮫島に「“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”へ入らないか？」と持ち掛けた。

男の話によると、“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”は学生を主軸とする狐原市の自警団であり、増加する不良共から街を護るために有志のメンバーを募っているというのだ。

自分をカツアゲしてきた不良共にムカついたこと、勧誘してきた男が誠実で信頼できそうだったこと、何より自警団という響きにワクワクさせられたことで鮫島は、“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”に加入することを二つ返事で承諾した。

それが全ての間違いだとも知らず。

加入から程なくして気付いた。自警団などというのは大嘘で、組織の実態はただの……いや、非常に統率のとれた大規模な不良グループだということに。

敵対グループへの襲撃など日常茶飯事、“狐狩猟犬（フォックスハウンド）”の名前を振

りかざし横暴を働く輩などざらにいた。
会員費と称し構成員から金を巻き上げる上層部、金を上納する代わりに組織の後ろ盾を得て好き勝手に暴れる構成員。ヤンキー漫画で見た不良よりも過激で、極道映画で見た暴力団よりも恐ろしかった。
――ここは自分の住むべき世界ではない。早く平凡な日常へと戻ろう。
加入から1年が経とうとしたある日、鮫島は組織を脱退するため、市内のとある金融業者から10万円もの大金を借りた。
脱退希望者は金さえ払えば、他の不良グループに入ったり組織に敵対するようなことをしない限り組織から手を出されないという。この規定がどこまで信用できるかわからないが、もう迷っていられなかった。
そして今の所、脱退してから2ヶ月経つが、組織からの干渉はない。平凡な日常を取り戻したかに見えた。
――が、鮫島は今、別の地獄にいる。
鮫島が金を借りた先は、いわゆる悪徳金融というやつだったらしく、どんどんと利子が雪だるま式に膨らんでいった。
貯金を全て返済に宛て、学費も仕送りも取り立てに持っていかれ、それでもなお、6桁の借金は返せそうになかった。
自宅のアパートへ毎日やってくる、厳つい顔をした黒服の男達。
その度に、頭を地面に打ち付けて謝罪する自分。
そしてその頭に、何度も何度も振り下ろされた真っ黒な革靴。
さらに、内臓を売れという非常に非情で非常に無慈悲な恫喝……
――何故自分がこんな目に遭わなければならない、何故平凡な学生生活を送ろうと思っていた自分がこんな目に遭わなければならない、何故自分が、何故自分が……
こうして一週間前、鮫島は道を歩いていた主婦に盗んだバイクで引ったくりを働くことになる。
そして今回も……

「今日の女はたんまり持ってそうだったな。こりゃ期待できるぜ」
大通りの信号でバイクを停車した鮫島は、金髪女性のブランド物で固めた服装を思い出して期待に胸を馳せた。それにこのバッグもおそらく相当な代物だ。質(しち)に入れればそれなりの金になるだろう。
鮫島は、“狐狩猟犬(フォックスハウンド)”時代にもやらなかったような大胆犯罪を堂々とやり遂げたのであった。
罪悪感などない、感じてる余裕もない。後はこのバイクを棄てて逃げるだけだ。そして日を改めて、“狐狩猟犬(フォックスハウンド)”時代に習った（といってもメンバーの一人に無理矢理教え込まれた）窃盗技術で別のバイクを盗み、再び引ったくりを繰り返す。潮時がきたら、引ったくりは止めて、今度は空き巣でもやって金を稼ぐ。それしか道はない。
「絶対に、内臓なんか売ってたまるか」
どんなにクズみたいな生活を送っていようが、死ぬのは絶対に御免だ。平凡な生活を取り戻して、平凡な幸せを手に入れるんだ。
鮫島は自らを鼓舞するように、オートバイのエンジンをブォォォンと吹かした。
とそこで、彼は唐突に震えた。
それは何故？
恐怖を感じ取ったからである。
言い知れぬ恐怖。えもいわれぬ恐怖。ありえない恐怖。信じられない恐怖。蛇に睨まれた蛙が感じるような恐怖。
首筋に鎌を突き付けられているかのような恐怖……
「よお。すまねえが、そのバッグ返してくれねえか？　つっても俺のモンじゃねえんだが……」
その声がするほうに、鮫島はフルフェイスのヘルメットで覆った顔を振り向かせた。
鮫島が乗っているバイクの左斜め後ろには、鮫島に“狐狩猟犬(フォックスハウンド)”脱退を最終的に決意させた存在が――

「ひ、ひいっ！　破壊神倉崎！」
白銀に煌めくママチャリのサドルの上で、蛙どころか蛇ですら射殺せそうな鋭い眼光を放ち、堂々と鎮座していた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3588w/

破壊神は少女のために

2011年10月11日08時06分発行